

## 「須田剋太」の芸術と人間性

増山雄三

力強い奔放なタッチが特徴の、洋画家である「須田剋太（一九〇六〜九〇）」は、父が教育者で埼玉の熊谷吹上で生まれたが、病氣療養などで、熊谷中学を七〜八年かけて卒業したが、絵の先生たちは彼の才能に驚き、美術学校を受験させたが、個性の強すぎる素描力は、受験という型にはまらなかった。

それで剋太は、その後、浦和で廃屋を借りて、東京にでることなく、十五年という長い期間をそこに腰を据え、その間の費用は、彼の母が亡父の恩給を割いて、その生活を保障してくれたので、彼は誰にも肘を抑えられる事無く、その個性を磨く事ができた。

それでも、三十代初めに故郷を離れて京都へ出て、更には奈良を見て、新薬師寺に泊って十二神将を画いたが、僧の上司海雲や抽象

画家の長谷川三郎にも出会い、長谷川の影響もあり、具象画から抽象画に転向した。それは、剋太の造形を豊かにした事は測り知れず、この時期に傾倒していた道元の宇宙論は、抽象的世界だったので、彼は風土に根差した抽象画の世界を創造し、その画業は、宇宙の神韻を訊く様な凄味があつた。それでも、抽象画に没入して二十余年を経て、やがて彼はそれを核として、新しい具象画を試みる様になつたが、もし長谷川が生きていれば、彼が剋太に送つたそれが、具象画の大輪の花を咲かせた事に驚くに違いない。一方、南都の一隅で四十才前後の須田剋太を見た、華嚴学の上司海雲は、「善財童児がそこにいるような感じがした」といったというが、この表現は、彼の最初の発見者の、上司海雲のユーモアも少し交じている。

以下、海雲の文章を書く、「以前、寺で講演をした時、聴衆の中に一人の善財童児がいた。善財童児というのは、五十三人の熱心

な華嚴經の求道者だが、一青年の熱心な眼差しに、善財を感じた。それが、新薬師寺に泊り、十二神将を描いて特選になった、須田剋太です。彼は今や、普賢菩薩であり、善財なる私の善知識であります」というものだ。

それで、海雲という人物は、真贋に厳しく、感受性が強い芸術愛好家だが、ただ、身が僧籍にあり東大寺観音院住職として、また東大寺の管長だったので、須田剋太の人間と芸術を、華嚴宗の世界で捉えたに違いない。

また、剋太と海雲は同年齢だったが、海雲が亡くなる前に、剋太における抽象から具象に至る完成を常に瞠目し、その巨大な結実を見た事に、喜びを感じていた。

それでも、剋太は常に毅然としていて、彼の芸術を語るには多くを要しないが、芸術は心の表現であるという、素朴で初原的な姿勢を、半世紀の間にわたり、少しも外すことなく続けてきた、というのは驚きである。

またその間、裝飾性には韜晦せず、流行で

もって渡世せず、道元によって触発された、  
自分の精神の輝きと、その光の屈折を、少し  
でも表現しようと生きてきたので、世俗から  
は遠い仙道を歩く事になったが、それはそれ  
として、剋太にとっては満足な道だった。

令和四年十一月